

第14回日本脳血管・認知症学会総会

14th Annual Meeting of the Japanese Society for Vascular Cognitive Impairment



ランチョンセミナー 1

日時 2024年7月20日(土) 11:55~12:40

会場 長良川国際会議場 4F 大会議室

〒502-0817 岐阜市長良福光2695-2

座長

池田 佳生 先生

群馬大学大学院医学系研究科 脳神経内科学 教授

病理からみたレビー小体病を 臨床やバイオマーカーの 視点から再考する

演者

渡辺 宏久 先生

藤田医科大学医学部 脳神経内科学 主任教授

レビー小体型認知症 (DLB) とパーキンソン病 (PD) は、背景病理としてレビー小体の出現を特徴とし、運動症状、精神症状、自律神経症状において類似性を有する。このため、DLBと認知症を伴うパーキンソン病 (PDD) を同一の疾患として扱って良いのか否か、長年議論がなされている。確かに多くの共通点を有するが、認知症前段階の認知機能低下様式、認知機能低下の重症度、APOE ε4の出現頻度、GBA変異の比率、ゲノムワイド関連解析結果、パーキンソニズムと認知症発症時期の関係、年齢の影響、パーキンソニズムの重症度や治療薬に対する反応性などは異なる。一般にDLBはPDよりも進行速度は速いが、興味深いことに、PDにおけるαシヌクレイン抗体療法の効果は、進行の速いタイプと遅いタイプで異なる可能性も指摘されており、DLBとPDではαシヌクレインの分子構造が異なるエビデンスも蓄積されつつある。ここでは今一度DLBとPDDの違いについて考えてみたい。

※学会への参加登録が必要なため、詳しくは学会HPにてご確認のうえ、お手続きください。

<https://www.plus-s-ac.com/vas-cogj/soukai.html>

共 催：第14回日本脳血管・認知症学会総会／東和薬品株式会社